じゃりみち 号外！

仮設支援連絡会
阪神大震災地元ＮＧＯ救援連絡会議
TEL 078-362-5951
発行日　1995.　9.15

····仮設支援情報····

ボランティアだけで孤独死は防げない！！

９月１４日神戸新聞夕刊に”仮設孤独死２カ月後発見　ボランティア分からず”と記事がでました。読まれた方も多いと思いますが、みなさんどのように感じられたでしょうか？
この西神第７仮設は全ての仮設群の中でも、最大規模の1060戸が入居している地域であります。
相次ぐ孤独死が報じられる中、だだっ広い造成地の中に建ち並ぶ仮設群を訪れると、ただ茫然とするばかりですが、６月初め、あるボランティア団体は活動拠点としてその地にテントを張り、この1060戸のケアを決意したのです。自治会結成にも大きな役割を果たしました。
毎日毎日、安否確認をくり返すのですが、未入居約50戸を除いた1000戸の一軒一軒の顔が見えてきたのは、ようやく８月の後半になってのことです。安否確認だけでなく、階段を作ったり、玄関と道路の間に踏み板をわたしたり、水はけをよくするために溝を掘ったりと、うだるような真夏の炎天下でも作業を続けてき、リーダーの一人はとうとう熱射病で倒れるということもありました。
仮設訪問をしているボランティア団体には１つの共通することがあるように思います。
それは「２度と死者がでないように！」と祈るような思いで仮設をまわっていることです。相次ぐ孤独死のことが報じられている時、新聞を見るのがこわいという現象
もあったようです。
死亡者を出さないようにボランティアは必死で頑張っています。しかし冒頭で紹介した記事の見出しを見ると、孤独死を発見できなかったのはボランティアの責任のように書かれています。警察や行政のことには全く触れていません。福祉事務所はどうしていたのだろうか？次々に疑問が涌いてきます。
孤独死がでるとしばらくはその仮設には警察官や保健婦、民生委員等が毎日のように訪問するという現象が起きます。私達ボランティアがまわっていると、この時だけはよく出会うのです。しかしそのうちに全く出会わなくなるのです。相変わらずまわっているのはボランティアと自治会だけとなるのです。この現象がはっきりと物語るのですが、死亡者が出てから慌ててまわっても後の祭りであって、どうして未然に防ぐことを考えられないのでしょうか？
例えば神戸市は「震災後に高齢者・障害者児童を対象に実施した『要援護者実態調査』によると震災による新たに福祉ニーズを生じた市民は2800人余り」（平成７年７月神戸市発表の「市民福祉復興プラン」より）と言っています。
もちろん震災前から対応していた福祉ニーズとの関連はあるが、要するに新たに生じた対象者が2800人ならば、警察・消防署・行政・市民・ボランティアがもっと有機的に調整をすれば確実にケアのできる数字だと確信します。この部分をまず解決するとともに、要援護者の対象に入らない６５歳以下のグレーゾーンをどのようにケアするのかを至急検討する必要があります。何故なら死亡者の半数以上は６５歳以下なのです。しかも重要なのはお茶会等を呼びかけても、訪問活動しても、全く表に出てこない人達（特に何度も何度も訪問しても留守で会えない入居者）が要ケアだと考えられます。
警察・消防署・行政・市民・ボランティア各々「死者をださないように！」と願っているはずです。五者の話し合いがしっかりできない以上、解決はありえないのではないでしょうか？
この「じゃりみち」をいつも読んでいただいている方で、安否確認に関して何か良い方法がありましたら是非情報を事務局におよせ下さい。

今回「じゃりみち」号外としてこの文章を発信させていただいたのは、最初に紹介した神戸新聞の記事を読んだ、日々仮設訪問をしている私達ボランティアは大変なショックを受けたからです。
たしかにボランティア側の不完全さもあったかもしれません。しかし、この記事のように警察・行政・保健所のことは一切ふれず、あたかもボランティアの責任のように読みとれるような報道に対して、はっきりと抗議の意志表示をしておく必要があるからです。
私達ボランティア側はこれを機に、冷静に改めて考え直さなければならないでしょう。
新たに犠牲者を出さない為にも、こんなことでへこたれずに、粘り強く頑張って行くことの意志表示でもあります。みなさん、こんな時こそお互いに助け合いながら励ましあって頑張って行きましょう！

尚、次回の仮設支援連絡会の全体会議は
９月２０日（水）18：00～20：00　場所はＮＧＯ連絡会議（毎日新聞ビル３Ｆ）です。
この問題についてもみなさんと考えていきたいと思いますので、是非ご出席下さい。